

## 新刊 Book reviews

□ Herausgegeben von: Moritz von Brescius, Friederike Kaiser und Stephanie Kleidt: **Über den Himalaya. Die Expedition der Brüder Schlagintweit nach Indien und Zentralasien 1854 bis 1858** 275 × 210 mm. 388 pp. 2015. Böhlau Verlag, Köln. € 29.90. ISBN 978-3-412-22493-6.

チベット高原あるいは中央アジア高原は、北緯25から40度、東経70から100度の範囲を占める。ヒマラヤなど、その周縁地域を含め、多くの自然史研究者がこの地域の自然と文物の多様性の解明に挑んできた。1960年から始まった東京大学のインド植物調査もそうした活動のひとつであった。

本書は1854年から1857年にかけて中央アジアを探検し、多くの学術的成果をあげたSchlagintweit兄弟の探検の概要紹介を目的として編集されたものである。Schlagintweit家の兄弟5人、Hermann (1826–82年), Adorf (1829–57年), Eduard (1831–66年), Robert (1833–85年), Emil (1835–1904年) はいずれもミュンヘンで生まれ、うち Hermann, Adolf, Robert の3人は Alexander von Humboldt に地理学を学び、1854年に中央アジア探検に旅立った。彼らはカラコルムと崑崙山脈を踏査し、Hermann と Robert は1857年にドイツに帰国したが、独り残った Adolf は同年カシュガルで殺され帰らぬ人となった。彼らは崑崙山脈を走破した最初のヨーロッパ人だった。

植物学が探検の主目的ではなかったが、彼らは相当数の植物標本を採集し、世界の研究者にそれを提供した。右上部に大文字のみで NORTHWESTERN INDIA あるいは TIBET と印字された、通常のサイズよりもひとまわり小さい台紙に貼られた植物標本に、この地域の植物研究者はしばしば接してきたことだろう。

この探検の成果の一部は、Hermann と Robert により、Results of a Scientific Mission to India and High Asia と題して、3巻分だけがライプツヒの F. A. Brockhaus から英文で出版され、地図や景観図などを見ることができる（たいへんな稀観本だが幸い東洋文庫のデジタル・アーカイブで読むことができる）。

人跡未踏とまでとはいえないまでも、情報資料の空白地帯に調査の機会を与えられた者は、何を

しなくてはいけないかを本書から学ぶことができる。とくに、ぼう大なコレクションの収集、その運搬、信頼のおけるサポーターを得るコツ、収集した資料の保存と整理法は有意義である。ドイツ語に不案内な私には詳細は理解できないが、挿入された多数の図表が解説に大いに参考になる。山岳地域を中心に見事な景観写生図が載るが、多くは Hermann や Robert, Adolf の手によるものである。さらに多数の同時代に撮影された写真、関連する人物の肖像写真、手紙、地図等からは眺めているだけでも、彼らが探検に赴いた地域の光景や時代が伝わってくる。

Schlagintweit の植物調査と標本について、自身もカラコルムの植物相を研究した W. Bernhard Dickoré による 13 ページに及ぶ解説が掲載されている（308 ページに載る標本作成中の名もなきモデルが Dickoré である）。

最後になったが本書のタイトルにヒマラヤの名が冠せられているのに違和感を覚えるのは私独りではないだろう。彼らが目指した地域は中央アジアであり、その南縁のヒマラヤではないからだ。

（大場秀章 H. OHBA）

□矢追義人：ミクロの自然探検 A5. 143 pp. 2011. 文一総合出版. ¥1,800 + 税. ISBN 978-4-8299-1129-7.

副題は「身近な植物に探る驚異のデザイン」。著者は国立がんセンターを定年退職した生化学者で、自然観察指導員。本書の準備ができて、イザ出版にかかるとした段階で、病を得て他界した。14種類の植物について、さまざまな形態や現象の実体～低倍率顕微鏡レベルのカラー映像を集めて、その生活ぶりを生き生きと記録したユニークな本である。表題の植物名だけ並べると、葉、ツユクサ、ヘクソカズラ、ツクシ、ムラサキケマン、ヒメオドリコソウ、ニワトコ、ネジバナ、サルスベリ、ガガイモ、キヨウチクトウ、オオオナモミ、ヤセウツボ、コゲラである。最後の章は、コゲラがオオブタクサの茎をつつくことの観察に基づく。

（金井弘夫 H. KANAI）

□長野県：長野県版レッドリスト植物編 2014 A4. 225 pp. 2014. ¥表示なし. ISBN no number.

長野県は維管束植物については 2004 年、コケ類、地衣類、藻類については 2005 年にレッドリ

ストをまとめているが、それから10年を経て、環境の急激な変化に対応するため、および環境省版レッドリストカテゴリーが2014年に改訂されたため、これに準拠してRD評価を見直すとともに、あらためて調査研究の上、本書をまとめた。

維管束植物では、前回絶滅(EX)と判定された31種のうち、ジロボウエンゴサクなど7種の生育または標本が判明し、絶滅危惧(CR)に復活した。また湿地や草原に生育する種や、動物の食害による影響が大きい種が追加された。特殊な例としては、行政区画の変更で県外(岐阜県)となった、旧山口村のみに産したハンカイソウとシソクサが除外された。この2種は、岐阜県ではどのように扱われるのだろうか?行政区画の分合は、人口の推移によって今後も起り得るから、RD種の待遇がその結果として変わるだろうことは、留意しておく必要がある。長野県は山口村のデータを、岐阜県に提供するのだろうか?まさか「門外不出」などとは言わないと思うけれど...そうしなければ、岐阜県は、山口村の調査を改めてやらねばならなくなる。

奥付や裏表紙には、価格や送料の表示がなく、内容の紹介に入る前につまずいてしまった。編集・発行者および連絡先は次の通り。

長野県環境部自然保護課 380-8570 長野市南長野幅下 692-2 (TEL: 026-265-7178)

長野県環境保全研究所自然環境部 381-0075 長野市北郷 2054-120 (TEL: 026-239-1031)

そこで県自然保護課へ電話して、価格や入手の手続きを尋ねたら、チラシが一枚FAXで送られてきた。1冊2,300円[定価1,800円+税500円(いずれも税別)]と記してあり、ホントにこの値段で手に入るのかどうか、はっきりしない。このチラシには振込用紙が付いていて、カシヨ株式会社(口座番号 00570-2-13433)と記されている。この会社名は本書の奥付では「印刷」という見出しの下に会社名が記されているだけで、住所も電話番号も表示されていないし、税額も含まれていない。税金分は発行者である長野県が負担する、と

いうのなら、わからぬことはないけれど、どうもスッキリしない。

チラシには「冊子販売についての問い合わせ先」という見出しの下に、カシヨ株式会社: 381-0037 長野市西和田1-27-9 (TEL: 026-251-0510, FAX: -0500)とあった。そこであらためて、カシヨ株式会社に問い合わせてみた。その返事は「税、送料込みで一冊2,484円」とのことだった。チラシでは、自然保護課は「冊子編集発行」についての問い合わせ先となっているし、奥付でも同様である。そして奥付では「印刷: カシヨ株式会社」とあるだけで、領価や販売についての案内はない。県自然保護課に直接申し込めば1冊2,300円で入手できるのかも知れないが、チラシにはカシヨ宛の払込取扱票がついているところを見ると、カシヨを利用するのが無難と思われる。お役所の出版物には、時々こういう要領の悪い表示があって、購入意欲を削がれるので、注意してもらいたい。

(金井弘夫 H. KANAI)

□高知新聞社(編): **Makino** B5. 229 pp. 2014. 北隆館. ¥2,200 + 税. ISBN 978-4-8326-0979-2.

2012年が牧野富太郎生誕150年であることを記念して、高知新聞社が2012年11月14日~2013年5月14日の70回にわたって連載したもの。従来知られた出来事を、牧野の自叙伝などに基づいて、「読み物」としてリライトしてあるほか、末尾に近づくと、牧野標本の整理に奮闘した人たちの苦労話がいろいろ出てきて、標本というものが、ものの役に立つようになる迄に、投入されるエネルギーの大きさが察せられるだろう。

206~221頁に、牧野が足跡を残した日本全国の県名・地名(外地を含む)と調査年が、略地図で示され、222~227頁には年譜がある。いずれも里見和彦氏のユーモラスなイラストつき。牧野博士ばかりでなく、植物標本というものについての、認識を深めるためにも役に立つことだろう。

(金井弘夫 H. KANAI)